

生まれ変わる武人―信玄奇誕説話と近世文芸

京都精華大学 堤邦彦

(1) プロローグ―輪廻と再生の説話伝承

① 小泉八雲「RIKI-BAKA」(『怪談』一九〇四より)

母親は死んだ息子の手のひらに名前を書き「次に生まれるときは幸せに」と願う。三か月のち富裕な家の子に再生。手の文字は死んだ子の墓の土をこすりつけると消える。

※東京富久町時代の八雲が実際に髪結いから聞いた話を再話。民間に流布した転生譚は古く仏教説話として語られた。

↓鈴木正三『因果物語』(寛文元年・一六六一刊) 【資料1】

上巻十九「善根ニ因テ富貴ノ家ニ生ル、事」

中巻十九「産子ノ死タルニ註ヲ作シテ再来ヲ知事」

※都市伝説「こんどは落とさないでね」

② 歴史人物の再生伝承群

・ 聖徳太子の三生(七生)

・ 平清盛の前世(『平家物語』)

・ 曾我五郎時致と信玄奇誕譚

・ 明智光秀と明智坊(『雍州府志』『扶桑怪談弁述抄』)

(2) 曾我兄弟の荒ぶる亡魂

③ 中世軍記『曾我物語』と時衆聖の死者鎮魂

・ 角川源義『語り物文芸の発生』一九七五、角川書店)

※時衆は大名家の陣僧となって従軍し、戦死者の埋葬、供養と鎮魂を行い、後には戦場に散った武者の物語を語った。

④ 近世仏教説話集と曾我亡魂譚

・ 『地藏菩薩靈験記』(貞享元年・一六八四刊)

善光寺参詣の修行者が富士の裾野の草庵に一夜の宿を借り曾我の亡魂にまみえる。

(3) 曾我五郎再生譚のバリエーション

④ 栗原信充『柳庵雜筆』（弘化二年・一八四五成、嘉永元年・一八四八刊）

【資料2】

・編者は甲斐源氏の血を引く国学者で、幕府の奥御祐筆の立場にあり『続武将感状記』などの著を残した。本書巻四は「勝五郎再生」などの口碑に続けて数種の歴史的人物の生まれ変わりを紹介。その中に曾我五郎の六生を記す。

- ①曾我五郎―②伊豆田中庄の五郎大夫―③水戸六地藏寺の恵範―④武田晴信―⑤長谷寺の専誉―⑥六波羅蜜寺の恵範

※①は「地藏功德 摺袈裟」の由来を語る伝承（『諸仏感応見好書』。現在、伊豆の善寺などで地獄の苦を除く「摺袈裟」の呪符が印刻・頒布されている。背景に伊豆箱根の死者再生信仰（日金地蔵など）との習合が見え隠れする。

※③、⑤は長谷寺の真義真言宗豊山派がかかわる伝承。⑥は未詳。

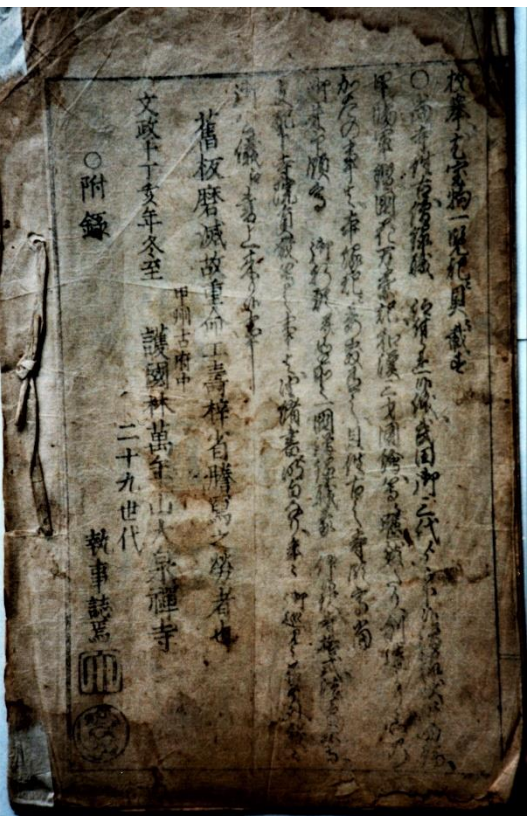
(4) 武田信玄の奇誕説話

④ f 甲府市古府中・曹洞宗大泉寺の「縁起略記」

【資料3】

※文政十年・一八二七刊の。「縁起略記」（甲州文庫蔵）。奥付に「舊板摩滅」云々とあり再版とみられる。『続曹洞宗全書』所収の『大泉寺縁起略記』と同内容。

※縁起の巻末に「天正十九辛卯年春日大泉寺六世孝国叟記焉」「創造よりこのかたの事は本縁起に委敷有」とあり、天正十九年（一五九二）以前の本縁起をもとに編纂されたものと思われる。武田氏は天正十年に滅ぶ。その直後、大泉寺が縁起を編んで、「曾我武田の因縁」とこれを奇縁とした大泉寺の開山を説いたのは、新領主の寺領安堵を意識した書き上げの側面を示唆する。



※開山縁起の中に山内に湧き出る「おおいずみ」の靈験を書き加えたのは、曹洞宗総持寺派の特徴付ける靈験説話のパターンに通じる筆法とみてよい。この門流の諸寺院の縁起には以下の特徴が顕著。すなわち開山和尚の法力により土地の神靈、邪神は濟度され、靈井、靈水の献上（たとえば「白山水」）を経て寺が開かれ領主の外護をうけて州内一の大寺院（僧祿司）に発展する。曾我武田の因縁も大局的には曹洞宗総持寺派の「神人化度」説話の一端に位置付けられる。大泉寺の開山・天桂和尚が神人化度の縁起を援用することの多い通幻・了庵の法系に属する点は注目してよい。（【参考】法系図参照）

《近世中期、大泉寺の在江戸布教活動》

大泉寺十四世安州は元禄（一六八八〜一七〇三）のころ江戸麻布の宿寺「大泉」に出向いて天正の由緒を講釈し、寺勢の伸張を幕府に働きかけた。

（国立公文書館・内閣文庫蔵『甲斐国寺社由緒書』）

※目貫の因縁にまつわる曾我武田の再生譚は、十七世紀末の江戸幕府周辺にあつて風聞となっていた形跡がある。↓次項の『新著聞集』

(5) 信玄奇誕説話の拡散と文芸化の軌跡

【資料4】 関連作品一覧参照

《説話、記録》

㊦ 神谷養勇軒『新著聞集』（寛延二年・一七四九刊）【資料5】

第六「甲州祐成寺の来由」

兄十郎の亡魂が弟五郎の信玄への再生を告げる

※ただし『新著聞集』には、天桂の史伝や大泉寺の寺誌に関する記載がいつさ
いみられない。『新著聞集』の記述内容は、一宗一派にとられない広汎な
口碑の流布と筆録の結果と思われる。

※本章末尾に「元禄十一年」に大泉寺の僧が「しかぐの縁起」を言い連ねて堂
宇の再興を願ひ出たこと、また証拠の目貫が武田越前守の所有に帰して手
元に現存したというリアルな情報を書き添えており話の口承性と臨場感が
うかがえる。

㊧ 阿部正信『駿国雑志』（天保十四年・一八四三成立）

※幕府の役人の立場から採取された口伝。恵林寺・快川和尚の逸事として語ら
れたもの。

《文芸作品》

① 荻田安靜の怪異小説『宿直草』

巻五の四「曾我の幽霊の事」【資料6】

旅僧が富士の裾野で十郎と大磯の虎の亡霊に逢い十郎自らの再生を告げられる。

※小田原には曾我兄弟の供養塔などの史跡(城前寺)がある。そうした情報を
縷い交ぜにした虚構か。

※作者の荻田安靜は上方で活躍した俳諧師で、歴史・伝説の読み直しに手腕を
発揮した。例えば巻二の十一「小宰相の局幽霊の事」は耳なし芳一伝説を取り
上げた最も早い時期の作品である。

信玄奇誕説話はここに至り、甲州在地の伝承から出版物を介して世俗に四散
する小説作品の一景にアレンジされていた。

① 奇談もの浮世草子『金玉ねぢぶくさ』(元禄一七年・一七〇四刊)

巻四の一「富士の影の山」

兄弟の契りを結んだ公家侍がともに出家して回国僧となり、富士の麓にて亡
魂から信玄の前世が曾我五郎なることを知らされる。若君誕生の一件はなく
信玄治世の時代に設定。目貫の所在を詳しく描写、事項に挙げたお家騒動物と
の関連がみられる。

② 八文字屋本浮世草子『当世信玄記』(正徳三年・一七一三刊)

諸国行脚の「自然居士」を主人公に信玄の再生譚を描く。家督を継いだ信玄を
めぐってお家騒動が起こり活劇となる。悪心は滅び曾我供養の法会をもって
大団円となる。当時の歌舞伎のお家騒動を改作した芝居仕立ての内容。演劇ネ
タの転用は八文字屋本の特色といえる。

(5) ふたたび口碑伝承の世界へ

① 『予陽郡郷俚諺集』(宝暦一二年・一七六二写)

伊予国温泉郡・真善院の縁起伝承。

・信玄の家臣が出家して真善坊と名乗り法華納経の六部聖となって諸国をめぐ
る。伊予の地に寺を建てて曾我五郎と信玄の再生譚を縁起に組み込んだ。

↓口碑としての再生伝承の地方伝播を伝えるとともに、この話を持って歩い
た納経聖の介在を示唆する。